

令和5年度 第2回北海道幼児教育推進協議会 「幼小連携・接続推進部会」 議事録

○日時

令和6年2月16日（金）14時00分～15時40分

○場所

Web会議システム zoom

○説明

- (1) 令和5年度幼児教育実態調査の集計結果について
- (2) 北海道版幼児教育スタートプログラム事業（文部科学省「幼保小の架け橋プログラム事業」を活用した道事業）の取組状況について
- (3) 小学校管理職を対象とした研修について

○議題

- (1) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛かりとした架け橋期の教育の充実について
- (2) 幼小連携・接続の意義等の理解を深める取組・体制整備について
- (3) 北海道版幼児教育スタートプログラム事業について

議題（1）幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛かりとした架け橋期の教育の充実について

（事務局）

議題1につきましてご意見をいただきたいと思っております。

幼稚園教育要領等の3要領・指針や、小学校学習指導要領では、幼児教育施設で育まれてきた資質・能力を、小学校教育を通じてさらに伸ばしていくためには、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛かりに、幼児教育施設と小学校の教職員が子どもの成長を共有するなどの連携を図ることとされております。

幼児期から小学校等への教育的な繋がりを確保するために、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛かりに、どのような取組が考えられるか、また、架け橋期の教育の充実に向けて、幼児教育施設及び小学校等で、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の正しい理解を促し、教育方法の改善に生かすための手立てとして、どのようなことが考えられるか。

以上の2つの論点をもとにご意見を頂戴できればと思っております。

（委員）

3月まで札幌市立小学校の教頭をやっておりまして、そこから幼稚園に入りました。小学校時代を考えると、幼児教育が正しく理解されていないという部分は結構あると思っております。小学校の先生にとっては、小学校教育の前倒しと捉えている先生も少なくはないと感じているところでもあります。

ただ、札幌市では区ごとに年3回の幼保小連携推進協議会を開催し、そのうち2回は、私立園も合わせて、全ての園の代表、学校の代表が顔を合わせて、接続連携について話し合う機会を設けております。それによって、互いの教育を理解することは少しずつ進んでいるところです。

令和4年度は、幼児教育を知ることがテーマになっており、10の姿について小学校側の先生にも理解していただくことが進められていたようです。今年度は、小学校教育を知ることによって、スタートカリキュラムについて園側の先生も一緒に考えながら、どのような改善が考えられるのかについて協議するような機会となりました。次年度以降も協議会の中身を濃いものにして、更なる連携推進を図っていききたいと考えているところです。

（委員）

私立幼稚園から見える市の幼小連携・接続の現状というものを少しお話させていただきた

と思いますが、今、委員からもお話があったとおり、市では年3回ほど小学校、保育所、幼稚園の先生方が交流をもつという機会があります。そこはとても貴重な場になっていますが、参加される先生方は主に校長、教頭あるいは幼稚園側で言うと園長・教頭・主任クラスで、現場の先生方同士が交流する機会がなかなか持てていないというところに、難しさがあるかなと思います。

また、架け橋期カリキュラムを全市的に作っていきこうという取組が、少なくとも私立幼稚園側から見えてこない。これはやはり規模が大きすぎるからこそその難しさがあるのではないかと思いますけれども、次年度以降、幼児教育センターあるいは教育委員会などがリーダーシップをとって、積極的に架け橋プログラムを全市的に作っていくという動きが出てくることを期待しているところです。

議題の幼児期の終わりまでに育てほしい姿を手掛かりとした架け橋期の教育の充実についてということで、幼児期の終わりまでに育てほしい姿を小学校の先生がどれほど理解しているのかなというところです。あくまでも私の感覚ですけども、この幼児期の終わりまでに育てほしい姿というものがあるということを理解していない先生も2、3割ぐらいいらっしゃるのではないかと、この言葉を知っているにしても、この姿の意味を深く理解されている小学校の先生が残念ながら少ないのではないかと印象を持っています。ですので、幼児期の終わりまでに育てほしい姿を、次の3つのステップを手掛かりとして進んでいくことができれば良いなと思います。

まず1つ目のステップとしては、小学校の先生に、この幼児期の終わりまでに育てほしい姿というものを、十分理解していただくことが必要かなと思います。そのためには我々も働き掛けるべきですが、私立幼稚園側から小学校の先生にレクチャーする機会がないので、道の幼児教育センターや市の幼児教育センターが幼児期の終わりまでに育てほしい姿がどんなものなのか、研修動画のようなものを作っていただき、小学校の先生が視聴するという、そういう機会をぜひ作っていただきたいなと思っています。

2つ目のステップとしては、研修で概念を理解していただいた後で、実際に幼児教育・保育の現場に、小学校の先生にどんどん足を運んでいただき、保育現場の実践から、幼児期の終わりまでに育てほしい姿を感じ取り、繋げて理解していただきたいということが2つ目です。幼児教育・保育の現場を小学校の先生に見ていただく機会をもっと作ることができれば良いなと思っています。

3つ目のステップとしては、1、2のステップをもとに、幼児期の終わりまでに育てほしい姿を意識したスタートカリキュラムを、小学校の先生に作っていただきたいなと思っています。さらにその先には、我々幼稚園の先生も、先ほども少し話が出たかもしれませんが、小学校のスタートカリキュラム作りに加わっていったり、あるいは小学校の先生が我々の幼稚園の後半のカリキュラム作りに少し加わっていただいたり、そういった双方の交流ができていくといいと思います。そういった取組をステップを踏みながら進めていく。小学校の先生に卒園・入学のときに、どんなふうにも子どもが育っていてほしいですかと伺うと、未だに、きちんと椅子に座って話が聞けるようになってほしいですという、こちらからすると、失礼ながら、単純すぎるような答えが返ってくるのですが、そうではなくて、例えば子ども同士で自分の思いを伝え合うような、そういう姿が見られてほしいとか、みんなが1つの目的に向かって頑張っていくそういう姿が育っていれば良いですよとか、そういった幼児期の終わりまでに育てほしい姿をキーワードにして、お互いが語り合える、そういう場面がもっと増えていって、それが小学校の教科学習というものに繋がっていくと、我々としてもありがたいなと思っています。

(委員)

具体的に幼小連携・接続を進めなければいけないなと思ったときに、保育園が今、何をどんなふうに行っているのだろうということを見ていただくということや、具体的にどの時期がいいかなということもいろいろ考えてみたのですが、例えば小学校の先生には、夏休み・冬休みがあるので、この時期がいいのかなと。実際、函館方面の小学校の校長先生が、自校の先生に、夏休みに保育園に行って保育実習をやっておいでと言って、実施した事

例がございまして、これが望んでいた実際に保育の現場を見てもらうこと、そして保育の中で子どもの主体性とか、子どもたちも年長になってくると、子ども同士の会議というか、共同の話し合いをしながら、調整力だとか、自己主張する力とか、そういうものを伸ばしている場面っていうことを紹介できるのにとっています。とにかく机を合わせた話し合いだけでは、やはり子どもの姿っていうのはなかなか見えないんじゃないかな。やはり、お互いに小学校に行ったり、保育園の先生に来てもらって、実際の場面を見ながら話してもらうということが、小学校の先生に子どもの姿を理解していただきやすいですから、具体的にどうやってその機会、チャンスを作るかということは今、考えなきゃいけない。機会を伺って、この校長先生なら話が通じそうだなってということとか、この教頭先生ならすぐ理解してくれているなということ、模索している最中じゃないかなと思っています。

(委員)

お二人の園長先生のお話を聞き、小学校はもっと頑張らなければいけないのだなと思ったところです。園の先生は本当に1人1人個別によく見ており、記録に残し、丁寧な引継ぎをしていただいていることに感謝しております。それによって、学校が親御さんと繋がり、スムーズに小学校の生活に入っていけるお子さんがたくさんいます。小学校としては、引き継ぎが必要な要素として、個に関するものと集団に関するものを分けて考えた方がよいなと感じています。個に関することとは、例えば多動傾向があり、椅子にしっかり座ってられない子ども、内向的で教室の入口を一步進んで入っていくことにもためらいがある子など、年齢が小さければ小さいほど様々です。集団への適応という視点では入学したときに、学級という集団の中で育っていく場面で配慮しなければいけないことを事前に知ることは学級づくりをするうえで欠かせないポイントです。引継ぎの際には、もう少し視点を分けて考えなければいけないなと、お話を聞いていて思いました。

家庭の状況やお子さんの状態のほかに、地域性もあると思います。だからこそ、この道教委のハンドブックにある、組織が繋がり、幼児と児童、保育者と教職員とが繋がること、幼児教育と小学校教育の教育課程等が結ばれることが大事になるのではないかと考えます。そして、幼児と児童、教職員のつながり、カリキュラムのつながり、その具体は何かと考えたとき、昨日本校であった1日入学を例にお話しします。いろいろな園からお子さんがいらっしゃって、本校では昨年まで、1年生がその活動を考えていました。今年度は、次年度6年生として園児と交流する5年生も加わって、どうしたら新しい1年生が学校を楽しんでくれるかということ、授業の中で考えました。例えば、子どもたちが考えた活動に、折り紙や国語でクイズのような単元があります。これを園児に分かるような問題にしたらかどうかということでグループに分かれて、考えるのです。一日入学の日になって、1年生はわくわくして待っていますが、そこにやってきた園児が、喜んで入ってくる子もいれば、入口の前で立ち止まった子もいました。それを見た1年生は想定と違うことが起き戸惑いましたが、そこで自分で考えて行動する姿も見られ学びがありました。そういうことがあったので、職員が早速来年はこういうふうにしたらいいなといった話を始めているわけです。来年度の1日入学の在り方や、どんな交流がいいのかということ。例えば、園の先生が保育で来ることはできなくても、園児の様子を録画して見てもらうとか。その園児の様子を見るということも、意味があるなと思います。

うちの小学校に関わってくださっているいろいろな園と連携し、この地域の子どもの育ちや、個々のたくましさ、主体性などを共通のポイントに置き、園の先生と小学校の先生が連携しカリキュラムに落とし込んでいければいいなと思いました。

その反面、小学校は小・中連携、中学校との連携も求められていますので、時間のなさを解決していく方策も考えていかなければいけないと常々考えているところです。

(委員)

私も3年前まで教員をやっております、38年のうちの36年間、中学校の教員をやっておりました。2年間だけ小学校に行きました。幼稚園と小学校の連携の話が出ておりますが、前の学習指導要領は、子どもに育まれる力が分かりにくかったけれども、今の学習指導要領は、幼稚園・小学校・中学校・高校とどんな資質・能力を育てるのが1本買かれたわけです。

そこを共通の言語として共通理解を図っていけば、ぶれないのかなとと思います。幼稚園ではそこを具体的にするために10の姿があると理解しておりますが、その中で、先ほどお話があったように、その地区や学校の実態に応じて、どこに力を入れてカリキュラムを組んでいくかを話し合っていけば、子どものためのスタートカリキュラムができてくると思います。

地方の実態ということでお話をさせていただきますけれども、スタートカリキュラムは小学校の先生が中心になって作っているところが多いと思います。当町の場合はどちらかというと、小学校から見た幼稚園の理解というものが、これを機に深まったかなと思っています。

逆に今度は幼稚園が、小学校のカリキュラムを理解するというのが大事になってくると思いますので、これから理解を深めていくことが、町の課題と思っています。

また、昨年度から秋田県の大館市と交流しています。小学校・中学校の授業を見て、主体的、そして対話的な授業の視察をさせていただきました。大館市は文科省のスタートカリキュラムの指定を受けていて、その話を聞く機会もありました。小学校の教員が幼稚園で保育の体験をするとか、幼稚園の先生が小学校生活科の授業に参加するとか、そのようなことを年間何回かやっていて、お互いの理解を深めることもやっています。それから、架け橋期のカリキュラムは、幼稚園1年それから小学校1年というのが、スタンダードなのかなと思いますが、大館市の場合には、幼稚園2年、小学校2年で計画して、カリキュラムを試作しているとのこと。非認知能力を育てるための非常に大事な4年間を徹底的にやろうということで、うちの町もこれから参考にしていきたいと思っています。

(委員)

本校の実践をお話したいと思いますが、本校は幼稚部・小学部・中学部を設置した特別支援学校ですが、先日も、幼小の渡り交流会、渡り交流研というものを先生方が行っていました。5歳児の子どもたちが今年新1年生になりますので、5歳児の子どもたちのこれまでの学びの履歴であったり、子どもたちの発達の姿であったり、それを小学部の先生方と情報交流をして小学校教育にスムーズに繋げるという情報交換、情報交流を主だったねらいとしてやっているものがあります。幼稚部、5歳児の授業を小学校の先生方が実際に参加して、交流を深めることもあります。以前いた学校で、同じような幼小の交流の情報交換会をしていたのですが、そのとき私は幼児教育セクションにいましたので、その視点で話を聞いていたのです。ある小学部の先生が、最近の子どもたちはドッジボールができない。幼稚部ではボールを使ってどんな遊びをしているのですかという質問をされたのです。これどういう意図があるのかなと思って、話の様子を伺っていました。小学部の先生は、子どもたちは体育の授業でドッジボールをやっても、なかなかボールの受け渡しや扱いをなかなかうまくできない。幼稚部段階でしっかりボールを使う遊びをやってください、と。小学部の教育に向けて、幼稚部で個々の技能とか資質能力を高めるねらいをもって、幼稚部の教育をやってください。ということだったのかなと思ってそのときは聞いていたのです。しかし、幼稚部の教育ってそういうことじゃない、全体的な発達を促すことをもって、それぞれのカリキュラム・プログラムで、日課を過ごしているわけだから。小学部の体育のドッジボールのために、ボール遊びをやっているわけではないと、幼児教育セクションの先生方で話をしたのです。

実は同じようなことが、今もあるのではないかと考えています。小学校で、カリキュラムベースで学習事業が行われています。教科書があって、エビデンスがあって、エビデンスベーストエデュケーションという言い方もしますが、身に付けなければならない資質・能力が明確に学習指導要領に示されていて、それを習得することで、当該学年の学習を終わる。そして、次の学年に上がっていくことが明確になっています。ところが幼児教育には教科書はありません。言い方が合っているか分かりませんが、発達ベース。もちろん教育課程があってカリキュラムはありますが、あくまでも発達ベースだと思います。子どものペースだったり、個々の子ども視点だったり、子どもの発達がどうであるかということ、具体的に表したのが、幼児期が終わるまでに育てほしい姿なのかなと、私の中では捉えています。幼児教育の先生方と小学校教育の先生方の教育のベース部分に少し違いがあるので、先ほど新しい学習指導要領は一本化して繋がっているというお話がありましたが、実際は幼児を担当している先生と小学生を担当している先生は、何か違うという感覚的なのかもしれませんが、

そこでストーンと落ちていない。情報交換をするけども、小学校に行ったら椅子に座って、教科書を広げて学習指導できなければ小学校らしくない、1年生の教科書が終わらないと駄目だよ、というような感覚になってしまうのかなと思います。

幼稚園のときは、幼稚部の担任の先生が一生懸命その子の発達に応じた学習課題を用意して、遊びを通して3年間学んできました。そして小学部1年生になって、なかなか学びに向かう関心・意欲・態度というものがまだ表面に表れてこない。子どもの状態は分かったけれども、1年生が終わるときに教科書が終わっていなければならない、そのジレンマを感じるのですと、1年生の先生に相談されました。私は返す言葉が見つからなかったのですが、そうは言っても子どもの発達が今こういう状況だったら、無理なことをしても仕方がないので、子どもの発達に即した内容を、教科書を用いて学習していく、薄板を積んでいくことをせざるを得ないのではないのでしょうかとしか返せなくて申し訳なかったと思っています。お互いの教育、立ち位置、立場、ベースとなっているものを確認し合うことが大事なのかなと思いました。

議題（2） 幼小連携・接続の意義等の理解を深める取組・体制整備について

（事務局）

論点は2点あります。幼児教育施設と小学校等との合同研修や、施設種の異なる幼児教育施設が合同研修を実施する場合、それぞれの勤務時間の違いなどから、研修時間の確保が課題となっております。こうした合同研修を実施し、参加しやすいものとするための工夫や配慮についてご意見をいただきたい。それから、実施事例等があれば情報提供をいただきたいというのが1点目でございます。

次に、幼小連携・接続を進めていくためには、幼児教育施設と小学校等との縦の繋がりに加えて、幼児教育施設間の横の繋がりも重要であり、各幼児教育施設や小学校等では、こうした関係をどのように構築し、どのような繋がりをもっているのか、取組事例等があれば情報提供をいただきたい、これが2点目でございます。

（委員）

毎年、北海道保育研究大会、北海道東北ブロックの保育研究大会等で、必ず幼保連携の分科会という形で、小学校の先生たちにも参加をしていただいた発表や、プログラムの作成、北海道の地域の実践を発表していただいて、保育士がほとんどですが、そこで学ばせていただいています。コロナ禍の4年間ぐらいは、交流という形はできなかったのですが、私が公立の園で園長をやっていたので、公立園や地域の小学校との連携を取っていて、コロナ前は行事に参加させていただいたり、運動会を見せていただいたり、学校訪問もしましたし、いろいろな行事のときに出ませんか、地域の学校の先生方、校長先生たちから声をかけていただいて、よく学んでいました。

特別支援の関係では、最近では小学校の特別支援の先生たちが発達に問題があるかなというところで、心配なお子さんは必ず園に見に来ていただいています。実際に保育園での保育の様子や集団の行動の様子ですとかを、見ていただいているので、その辺は連携が深まっているのかなと思います。

コロナが終わった時期ですので、これからまた戻していこうかなというところです。皆さんの話を聞いていて、幼児期の終わりまでに育てほしい姿については、保育士もそれに沿って、要録を書いていくことがとても難しいと思います。その個の特徴を見て、肯定的に考えていく。マイナス方面ではなくこういうことが伸びましたという形で書いて、それを伝えていきたいのですけれども、少しこういう面が困るかな、小学校に入ったらこういうことが困るかなということも、書いていきたいところもありますので、そこをどう書いていたら、先生たちに分かっていただけなのか、どう思っているのかなというところの勉強会をしていただいて、繋がっていききたいなと感じました。

（委員）

まず、論点の1つ目の研修時間の確保ですが、都市部では1つの小学校に対していろいろ

な園や施設から入学してくる。当園のような町ですと1つの小学校でせいぜい数園ぐらいしか入学してこないで、合同研修会のハードルの高さも違うので、同じことをやってもうまくいかないと思いますので、それが前提としてあると思います。また、近年働き方改革が進んでおり、例えば、それぞれの施設が終わってから、みんなで集まりましょうというのも現実的ではないと思いますので、就業時間内で研修会をやらなければいけないと思います。研修会のその規模にもよると思うのですが、小学校からも、園からもかなりの人数を出すとすると、例えば、研究会等で午前授業になったり、学校が休みになったりしますので、そうでもしないと、就業時間内で多くの職員が集まって、合同研修というのは難しいと思います。

行事等もありますので、事前の日程調整等は必要とは思いますが、段階を踏んでいただければ、保育施設側も参加することは可能かと思えます。ただ、私立の園側からそういったことをやりましょう、午前授業にしてくださいとお願いすることは難しいと思うので、再三こちらの部会でも申し上げてきましたが、自治体や教育委員会等で音頭を取っていただくことが必要だと思えます。

先日、ある園の公開保育に参加しましたら、小学校の先生が参加されていて、素晴らしいなと思ったのですが、皆さんおっしゃられていましたけども、まず見ていただくこと、その逆も然りですね、我々幼稚園側は、保育園側や小学校の授業等を見る。そういう小さなことから始めることも大切だと思います。お互いを知ることが重要かと思えます。

あとは論点の2つ目の横の繋がりですけれども、地域の子ども子育て会議ですとか、園長会もありますし、あと多くの園や法人は幼稚園団体ですとか、保育園団体等に所属してると思えますので、そういったところで横の繋がりとというのは確保しています。そこでは最新の制度の情報交換ですとか、保育のやり方だったりですとか、悩みとか、細かいところを共有したり、あとは、この幼小連携うちの町ではこういうことやっているよとかそういう情報を得たりなどでできております。

(委員)

幼小の架け橋という言葉がありますが、架け橋は何で出来ているかと考えたときに、紙とか、数値とかそういうことではない。保育園を卒業して小学校に行っても、園に遊びに来たときに、何か悩んでいるな、生き生きとしているなとか、いろんな様子を見て、小学校はどう？というようなことを聞きながら、関わっていく。架け橋とは、私たち人だと思えます。保育士であり教師であり。どちらも知らないと架け橋になれないですよ。幼稚園の先生が学校のことをよく知らないと、また逆に小学校の先生も。何が小学校以前に発達しているのか、土台ができていくのかというと、非認知能力は小学校以前の0歳から1歳、2歳のときにでき始めるところです。それが発達の始まりであり、それから、子ども同士で喧嘩をしたり、話し合ったり、物を作って、はさみで切ってみたりという簡単なことを体験しながら、子どもたちが一生懸命積み重ねて、それが次の知識や学びの土台になっていく。保育園・幼稚園では、幼稚園教育要領や保育所保育指針で、幼児教育というのは環境を通して行うことであり、カリキュラムとか、紙ではなくて、子どもが感じたものに対して、次にどういう学びに繋がっていくかということのをうまく誘導していく保育士の気付き、これはいい子どもの気付きだから、伸びるような質問を返してあげよう、それから言葉にしても、愛着関係の中で言葉を覚えていきます。寒いときに、親やおばあちゃんがこの感覚を寒いという言葉で、変換してくれる。このような作業が、幼児、乳児の発達を進める。学校でいうとカリキュラムです。そういうことを保育園でもやっているのだということ踏まえて、小学校の先生が、幼稚園・保育園から来た子どもを受け入れ、保育園でこういうところが育ってきたんだねと理解してもらえれば良いなと思えます。

職員同士の交流、会議の場、保育参観や学校参観が日常的に進んで、お互いの知識が付かなければ、架け橋になれないと思えます。小さなことでも架け橋になるよう、行事のときに一緒に活動してみるとか、小学校で花壇の手入れをしていたら、花を植えるところを見学したり、手伝わせてもらったり、ちょっとしたことを見守る中で、子どもでもこんなことに気付いているんだということに、小さい子どもでもリスpektするような場面というのを見たりする。子どもたちが小学校で、新たな問題にぶつかって悩んだり、不登校になりそうにな

ったり、そういうお子さんが保育園に遊びに来たときに、1日ここで遊んでいきなさいと言ったら、喜んで、喜ぶから給食も食べていいよという、次の日も来ていいか、友達も連れてきていいかというような、何かリラックスした状態になって。子どもなりに3年生や4年生ぐらいのときに何か壁とか、友達関係で悩むことがあったときに、こちらの方からも声をかけてやるのが、小学校へ行っても続けばいいなという思いもありますし、その一言がうまく架け橋になるかなと思ったりしています。各幼稚園、小学校の先生方のちょっとしたアイデアとか、思いつきでいいので、何かお互いのことに関与すると、少しでも各自、自分ごととして、楽しんで身に付けるチャンスが増えれば、自然と架け橋が丈夫になっていくのではないかと思います。

(委員)

研修時間の確保は、取組の利点や効果が実感されていないことが、課題であるということであったと思いますが、この連携の取組の利点、効果を実感するとはどういうことだろうかと考えます。例えば小学校では不登校が大きな問題になっていて、中学校でさらに増加傾向にあり、一番長いスパンで子どもを預かっている小学校、ここで不登校になってしまうことは、改善しなければならぬ問題だと思えます。1年生が元気に学校に来てほしいという思いがあるから、小学校の教員は、明日の授業の準備の時間があるけれども、研修に出かけよう、様子を見に行こうと思う動機となるのではないかと思います。自分たちが抱えている課題のヒントが得られる、解決策が得られると思えるものであれば、幼小連携・接続への取り組み方も変わるのではないのでしょうか。今、小学校では、子どもを帰した後退勤時間までのわずかな時間の中で明日の授業5時間分6時間分の準備をしています。その時間は本当に1時間もないのです。子育てをしている先生は時計を見ながら、明日の授業の準備をしている中で、研修時間を確保するには、効果の実感、小学校が悩んでいることへの問題解決のヒントがあるということがまず必要かなとお話を聞いて思いました。

今、札幌市では小学校と中学校がパートナー校としてつながり、この地区で子どもを育てようという動きが加速しています。15歳までに育む「15の姿」というものがありまして、私の地区では「自ら気づき、考え、実行する力」を合言葉に子どもを育てようという連携を模索しています。幼稚園・保育園もここに繋がっているわけで、私は校長として、たくましさだったり、人と関わる力だったりというものを大事に園で育み、その力を小学校で伸ばしていくことが大事だなと思っています。子どもを育てる上で大事にしたいことを地域にも発信し、家庭はもちろん、この地域の子どもにこんな力をつけていこうよということが、学校教育の中で必要ではないかと思います。コロナでずっと行けていなかったのですが、この秋に近くの園から生活発表会の案内をいただいて、行かせていただいたときに、先生たちが1人1人関わっているのを目の当たりにし、何を大事にして、どこでつながり、この子が中学生になるまで、地域全体でみんな育てていかなければいけないことなのかなと改めて思いました。

研修の時間確保ということ言えば、効果が実感できる研修である。そこには子どもの生の姿が介在していないと、ただ難しい言葉が飛び交っても意味がないと私は思います。小学校が、幼稚園・保育園の皆さんの御努力に報いることができていると今日のお話を聞いて痛感しましたので、機会がありましたらそんなことも伝えていきたいなと思っています。

(委員)

特別支援では、円滑な接続というときに、個別の教育支援計画というツールを使います。幼児期で障がいもしくは障がいの疑いがあるという段階で作成を始めると思いますが、それを使って、幼児教育・保育、小学校・中学校・高校と、その子どもについて、教育支援に必要な情報をどんどん書き足しながら次に渡していくような制度があります。これはどこに行っても通用するものです。北海道でも札幌でも、もっと言えば全国でも。このスタートプログラムを行うにあたって、全道どこでも同じようなスタンスで、円滑な接続ということを考えていけているのかなと思いました。本校は、校区が札幌市、石狩、後志、空知南部と非常に広域ですので、いろんな町から本校に入学してきます。ある特定のエリアだけ考えていけばいいとは当然ならないので、共通の情報共有ツールがないことには、円滑な接続、教育のスター

トとはなり得ないところもありますので、そのようなシステムを全道的に構築していくことになると思います。実際にそういう何かを幼児教育施設に新たに作っていただいて、それを使って小学校に接続ができるかということ、なかなか難しい話だと思いますが、特別支援は子どもたちの必要な情報を盛り込んだ支援計画を使って、接続をしています。

研修でいうと、本校は幼稚部と小学部が同じ校舎の中にありますので、時間の調整は行いやすいです。ただ、日課が違いますので、幼稚部の先生方と小学部の先生方の日課をいかにすり合わせて、研修とか、情報交換、ケース会議の時間を設けるか、教務の先生が工夫していますが、これは幼稚園、小学校という立地の違う教育施設だと、調整は大変だと思います。

本校の場合、小学部に入学する子どもで、幼稚園等から入ってくる子どもはそう多くはないのですが、数年に1、2ケースあります。そういうときにはなかなか研修まではいかないのですが、情報共有でお互いに行ったり来たりは時間を作ってやります。今だとリモートも使えますので、距離や時間の壁をなくしていくこともできるのかなと思います。

議題（3） 北海道版幼児教育スタートプログラム事業について

（事務局）

議題3につまましては、北海道版幼児教育スタートプログラム事業による取組の成果を持続的で広域的なものとするための方策を考える上で、基本となる考え方ですとか、留意すべきこと、大切にしなければならないことなどについて、ご意見をいただければと思います。

（委員）

札幌市は規模が大きいので、全市的に、全て網羅してというのはかなり難しい気がしますが、札幌らしいコミュニティスクールのあり方が、小中を中心に広がってきていますので、小中一貫で行っている縦の繋がりの部分から、コミュニティスクールに向かっていく横の繋がりと社会と繋がるという部分で、幼児教育施設もそこに関わりながら、市立も私立も含めて、学校を中心として地域と繋がっていきけるような形をとればいいのかと思っています。

（事務局）

幼小連携接続、架け橋ということ 키워ドにしながら、今日はたくさんのご意見をいただきました。

例えば、幼稚園教育要領等や学習指導要領で、今、幼児教育施設、小学校・中学校・高校はある意味コンテンツベースというよりは、コンピテンシーベースで繋がっているというお話いただきましたけれども、まさにその部分かと思います。

教育・保育に携わる者は、それぞれのことを知っておく必要があると感じました。その中で、今日は幼小連携・接続がテーマですので、小学校の先生は、幼児期の終わりまでに育てほしい姿を理解しておくことが必要だと思いました。その上で、実際に足を運んで、双方の教育・保育を子どもの姿から見ていくというようなこともお話をいただきました。これは、合同研修においても同様であるというようなご意見もいただき、まさにそのとおりだなと思いました。

それを意識して、スタートカリキュラムに繋いでいく、できれば一緒に作っていったら最高ですけども、そういった形を作っていくということが、必要だということを改めて感じました。その際に留意することもたくさんご指摘いただきました。

例えば、個がそれぞれ違いますので、個に対することと、集団の中で育てていくことを、視点を分けて考えることですか、さらにそこに地域性が関わってくるというような、留意点もお話いただきましたし、ベースになっているものは同じようで、やはり環境を通して行う保育と、カリキュラムで行う教育っていうのは微妙に違うということで、これを確認し合いながら進めていくことの大切さをご指摘いただきました。

お話をいただく中で、物理的な時間の問題ですとか、働き方改革、それから小・中学校においては不登校の問題等についても、たくさんの課題もいただいたところです。

最後になりますが、架け橋という言葉から、やはり保育者、教員が、要するに人が架け橋

を作っていくものだと、どちらも双方のことを知らないと、お互いの知識を高めていかないと、丈夫な架け橋にはならないのではないかというような、大変印象的な言葉をいただきました。幼小連携・接続というのは、私たち義務教育課幼児教育センターにおいても、大変重要な課題と捉えておりますので、今日いただきました貴重なご意見をもとに、さらにこの取組を進めてまいりたいと改めて感じました。

たくさんの熱のある御意見をいただきありがとうございました。